

視察報告書

福岡県大野城市・鹿児島県南九州市

平成26年4月30日（水）～5月2日（金）



南九州市 知覧特攻平和館

松阪市議会

青凜会

平成26年5月12日

松阪市議会議長 中島 清晴 様

松阪市議会
青凜会 濱口 高志

平成26年4月30日（水）から5月2日（金）の間、行政視察を実施しましたので下記のとおり報告いたします。

記

1. 参加者

青凜会 野口正 沖和哉 濱口高志

2. 観察先および観察事項

(1) 福岡県大野城市

① 古代山城サミット事業について

(2) 鹿児島県南九州市

① まちなみ保存（武家屋敷など）について

② 平和教育（知覧特攻平和館）について

3. 観察内容

別紙のとおり

I. 福岡県大野城市

1. 大野城市的概要

- (1) 人口 98,401人
- (2) 面積 26.88 km²
- (4) 概要 市内各所で遺跡が発掘されている。663年(天智2年)、白村江の戦いで日本が大敗したのち、665年(天智4年)、天智天皇の命令により、現在の市域内にあたる大野山(現在の四王寺山)に百濟人・憶礼福留と四比福夫の設計による古代山城である大野城(おおののき)を築城し、大宰府防衛を図った。

第二次世界大戦中は福岡市から当時の大野村に疎開する者が居た。昭和30年代から昭和40年代にかけて人口急増に拍車をかけベットタウン化が進んだ。

市制施行前は元々「大野町」という地名であったが、1972年の市制施行にあたり福井県に大野市が存在していたため「大野市」とすることができず、この城の名にちなんだ「大野城市」という市名にした。現在でも福岡市のベットタウンとして、人口は年々増加傾向にある。

2. 対応者

- 大野城市議会事務局 事務局長 白石 順三氏
大野城市議会事務局 主事 富吉 俊介氏
大野城市教育委員会文化学習課 係長 山本 耕督氏
大野城市教育委員会文化学習課 主事 田中 律子氏



大野城市役所にて研修

3. 観察項目

(1) 古代山城サミット事業について



大野城市教育委員会文化学習課 田中主事 山本係長

1) 古代山城とは

古代山城とは、西日本各地にある山全体をひとつの防御施設とした、古代に造られた大規模な城の呼称である。それは大きく下記の2つの種類に分けられる。

- ・朝鮮式山城

日本書紀などの文献に記載されている山城で、大野城を含め6城ある。

- ・神籠石系山城

文献に記載されず、山腹を石列で囲んでいる状況から、当初は靈域と考えられていたが、その後の発掘調査により防御施設と判明した山城で、16城ある。

これらの古代山城は、全部で22城、31自治体にまたがっている。

2) 神籠石サミット

平成18年に山口県光市において第1回神籠石サミットが開催された。その後平成19年も山口県光市（石山城）、平成20年は福岡県行橋市（御所ヶ谷）、平成21年には福岡県久留米市（高良山）にて開催された。

大野城市も第1回から参加しており、大野城市でも開催したいと考えていた。

3) 古代山城サミット開催に向けて

平成20年5月に、市長・県議・市議会・文化連盟・区長会・商工会・体育協会・小中学校長会・女性ネットワーク・子ども文化団体などからの代表者により、古代山城サミット実行委員会を設立した。

朝鮮式山城所在自治体に対し、サミットへの理解と協力を求めるため、5つの班に分け親善大使を派遣した。

そして、平成21年に大野城市第5次総合計画の中でサミット開催を明記し、平成22年2月10～11日の2日間で古代山城プレサミットを大野城市で開催した。

4) 第1回古代山城サミットの概要

平成22年9月24～25日に、パブリックステージとして、水城跡、大野城跡の見学、自治体首長会議を開催した。

シビックステージとして、古代山城サミット宣言の採択、シンポジウム、小中学校による学習発表、伝統文化披露などを行った。

開催費用は教育費から1千万円計上された。

5) サミットから生まれたもの

・大野城物語

史跡を身近なものにするために、歴史的事実と、その時代の暮らしや文化をイメージできるストーリーを「大野城物語」として創作した。

平成22年に5千部作成し、平成23年には漫画版を3千部と紙芝居を5百部作成した。漫画は小中学校にクラスに1部配布、紙芝居は各小学校に学年に1部配布した。

・旗の舞

大野城市内の5中学校に対し、5種類の曲と5種類の旗を、山城「大野城」が築城された時代を背景に、オリジナルで創作した。

現在も、「おおの山城大文字まつり」や各中学校での体育祭・文化祭で披露されている。

・大野城の舞

山城の築城に関わった人たちが、その完成を祝って舞い踊るという明るいイメージをコンセプトとして創作したもので、現在も「おおの山城大文字まつり」の中で、保育園児により披露されている。

・大野ジョー

サミットのイメージキャラクターとして誕生した。現在は、大野城市、大野城跡P

Rキャラクターとして活躍している。

- ・おおの山城大文字まつり

従来から開催されていた「おおの大文字まつり」とサミット関連事業として開催された「日本最古の山城まつり」を統合し、平成23年から「おおの山城大文字まつり」として開催している。

催しの一つとして、サミット関連自治体の伝統文化団体を招聘し、演技披露を行ってもらっている。

6) その後のサミット

平成23年は熊本県山鹿市・菊池市、平成24年は長崎県対馬市、平成25年は香川県高松市で開催したが、平成26年は立候補自治体が無かったため開催できなかつた。しかし、平成27年は佐賀県基山町で開催が決まっている。

平成23年には、大宰府まで13カ所を経由した「のろしリレー」も実施した。

4. 所感

「大野城物語」は史実に基づいてはいるが、想像の部分が多く、まさしく「創作」である。これをもとに「舞」を作り、保育園、小中学校に対して郷土の文化についての教育をしているのには感心した。そんな大胆なことを公が行い、それにより正式に他の自治体との交流を行っているというのは目から鱗が落ちる思いがした。

松阪市においても、「史実」とはいえないが、興味深い伝説は各地に残っている。大野城市のように思い切って「創作」し、地域活性化、それに関連がある他の自治体との交流の手段として活用するのもおもしろいのではないかと感じた。

II. 鹿児島県南九州市

1. 南九州市の概要

(1) 人口 38,676人

(3) 面積 357.85 km²

(4) 概要 薩摩半島の南部に位置し、鹿児島市の市街地から約30km南西に位置する。
南は東シナ海に面している。

2007年12月1日に、川辺町・知覧町・頬娃町が合併して南九州市が発足した。これにより、川辺郡および揖宿郡は消滅した。

旧知覧町は特攻基地、武家屋敷等の観光、お茶が特産である。

2. 応対者

南九州市議会事務局 係長 菊永 隆信氏

南九州市教育部文化財課 係長 東垂水 忠二氏

南九州市教育部文化財課 主査 坂元 恒太氏

知覧特攻平和会館 館長 菊永 克幸氏



南九州市役所にて研修

3. 観察項目

(1) まちなみ保存（武家屋敷など）について

1) 保存地区の概要

薩摩藩の113外城のひとつで、南薩の要所として270年ほど前に造られ、知覧島津氏（佐多氏）の領地であった。領主の御仮屋を中心として道路割をなし、防備を兼ねた城星型の区画となっている。

また、武家屋敷の戸ごとに庭園が築かれ、主屋と庭園が調和していることと、通りに面した石垣の上には大刈り込みによる生垣が続き、地域全体が自然をよく取り入れたひとつの庭園都市的な造りとなっている。



国指定 南九州市知覧重要伝統的建造物保存地区

昭和49年に武家屋敷並びに庭園をいかに保存・保護すべきか方向づけるために、財団法人日本船舶振興会の補助を得て、財団法人観光資源保護財団（現在の財団法人日本ナショナルトラスト）が調査を行い、報告書を刊行した。

昭和51年に知覧町教育委員会の重要性の調査を行い「知覧武家屋敷の町並み」として伝統的建造物群保存対策調査報告書を刊行した。

そして、昭和56年2月23日に区域内の7庭園が国の名勝に指定され、11月30日に地区の18.6haが重要伝統的建造物群保存地区として選定を受けた。

2) 伝統的建造物群保存事業

- ・修理事業

伝統的建造物の解体修理、部分修理、石垣の積直しなどがあるが、特別な場合を除き補助対象は外観に限られる。

- ・修景事業

伝統的建造物以外の建物の外観を伝統的建造物と調和し、その地区にふさわしい形態に修景整備する事業で、生垣や石垣等の新設事業も含まれる。



トタン張りの外壁を板張りに外観修理

- ・復旧事業

生垣補植等の土地の自然物などの環境物件に関する事業を指す。

- ・管理事業

南九州市が自ら行う事業で、保存地区において建造物の管理等に必要となる防災施設をはじめ、標識、説明板、案内板、境界線等の設備の設置を行う事業を指す。

- ・事業費

直接事業（南九州市が直接行う事業）は、国65%、県5.25%の補助がある。

補助事業（地区内の所有者または住民が行う事業）では、所有者は20%、もしくは30%の負担で、補助割合は、80%もしくは70%となっている。補助金の内訳は国65%、県5.25%、市29.75%である。

今までに31件の事業が補助対象となった。補助率は高いが外観と構造材のみが補助対象で、内装工事費は補助対象外である。

・街路整備事業

関連事業として、県道谷山・知覧線の街路整備を昭和48年度から平成8年度に行った。伝建地区内にも植栽されているイヌマキを街路樹とし、清流水路を整備し、鯉を泳がせている。



県道の街路 清流水路に泳ぐ鯉

3) 保存事業の運営

地区内の国指定名勝に指定された7つの庭園は一人500円の入園料を徴収しており、この収益で運営している。7園のうち6園が個人所有であり、この入園料の収益により、所有者個人が庭園の整備を行っている。昨年は22万人の入園者があり、入園料収入は約1億円に上っている。

(2) 平和教育（知覧特攻平和会館）について



知覧特攻平和会館にて研修

1) 建設に至った経緯

昭和40年代に入ると日本経済も安定成長期に入り、特攻関係者から「特攻銅像の建立」と「遺品館」建設の声が続出し、全国の特攻関係者や一般有志の方々に募金を呼びかけて浄財による建設を計画した。しかし、オイルショックで計画が頓挫した。

その後、昭和49年運動公園の休憩施設として過疎債を利用し、「特攻遺6品館」を建設した。当初は319.75m²であったが、昭和50年に128.25m²を増築、昭和55年に零戦展示室(46.75m²)を増築した。

その後、全国から訪れる人が多くなり、大きな反響が寄せられ、展示資料も多くなり手狭になってきたため、昭和62年に場所を移して「特攻平和会館」と改名した。鉄筋平屋建て 1607.55m²と大規模な施設となった。その後も増築を繰り返し、現在では延べ床面積 3193.68m² 敷地面積 10298.85m²となっている。トータルの工事費は約10億円に上った。

2) 教育・普及活動

戦争を知らない世代への平和を考える学習の場として、教育旅行・修学旅行の誘致を図り、健全で正しい平和学習の推進を図っている。

現在、語り部が6名おり、特攻の事実・戦争の悲惨さ・平和のありがたさ・命の尊さ・家族の絆等について、説明・案内をしている。語り部の年齢は62～86歳である。

平成24年度の修学旅行の状況は、小学校264校（13049人）、中学校192校（21919人）、高校171校（22029人）、その他48校（3331人）となっている。

また、毎年8月に「平和へのメッセージ from 知覧スピーチコンテスト」を隣の文化会館で行っている。毎年4千件ほどの応募があり、それを書類選考で8件に絞り、さらに音声審査で4件に絞り、文化会館でスピーチコンテストを行っている。最優秀賞の賞金は一般30万円、高校20万円、中学15万円となっている。

今回の研修では、最高齢（86歳）の語り部 峰苦眞雄氏にお話しを伺った。峰苦氏は我々が松阪から来ているということから、松阪から特攻に出た3名の写真、辞世の句をまず紹介し、さらに三重県の方についても説明をいただいた。驚いたことに、全ての辞世の句、生い立ちを暗記しておられた。また、峰苦氏は軍隊には所属していなかったが、実際に戦争時の知覧基地を見ており、生々しい話を聞かせていただいた。

3) 施設の運営

当施設は市の直営で行っている。昨年度は53万6千人が入館した。修学旅行者は6万人であるため、大部分が一般の入場者である。一般の入館料は500円としているため、入館料で年間2億円の収益がある。運営費用が1億円かかっているので、1億円の黒字となっている。その中から8千万円を平和基金に積み立てている。

今までの最高入館者数は平成14年の73万5千人で、この時は高倉健主演のホタルが上映された効果と考えている。平成22年は震災の影響で42万4千人まで落ち込んだが、徐々に回復してきている。今年は「永遠のゼロ」が上映されているので、増加が期待される。

また、世界遺産登録を目指して活動しており、登録されれば更なる入館者数増が期待できる。

4. 所感

(1) まちなみ保存（武家屋敷など）について

武家屋敷はさすがに伝統的建造物保存地区に指定されているだけあって手入れが行き届いていた。視察前には御城番と同レベルの物を想像していたが、規模の大きさにびっくりした。また、保存に関する費用を7庭園の入園料を用い所有者が維持しているのにも驚いた。生垣の手入れは背も高く手がかかり、また落ち葉もきれいに掃除するのにも日々の作業が必要になる。所有者の伝統文化保護に対する意識が非常に高いものと思われる。

武家屋敷群への観光客数は庭園の入館数でカウントしており、正確な値で管理しているのは、松阪市も見習う必要があると感じた。



借景を利用した庭園（生垣と後方の山の稜線が調和している）

(2) 平和教育（知覧特攻平和会館）について

特攻隊員の自筆の書き物を拝見し、自分たちの半分にも満たない十代の若者の純粋に国を思い、母を思う姿が感じられ、涙が出た。

幕末から終戦にかけて、当時の若者は本当に素晴らしい人材が日本には豊富だったと思う。自分も含め、平和ボケし、自分中心の人間が多くなった現在は、本当にいい

時代なのか疑問であるが、特攻で散った隊員のためにも、戦争は2度と起こってはならないものであると強く感じた。

(3) その他

川辺町・知覧町・頬娃町が合併して「南九州市」となったが、全国的に知覧という地名はネームバリューがあり、また知覧茶という特産品もあるため、大きなお世話かもしれないが、「知覧市」にした方が、良かったのではないかと思った。

同レベルの規模の町の合併なので、他の2町の反発はあったと思うが、観光客を誘致するのには知覧市のほうがよい気がする。

また、武家屋敷、特攻平和会館とも入園料・入館料で運営費を賄っているのには驚いた。特に特攻平和会館は1億円以上の収益がある。単に歴史・文化の保存に公費を投入するのではなく、知覧のように自活していく方法を松阪市でも考えていきたい。

以上